

明日への ことば

絶望から甦る心よみがえ

今年一月、マグニチュード七・〇の大地震がカリブ海の小さな島国・ハイチを襲いました。こんなとき、被災地にいち早く人員を派遣し、現地のニーズを見極めて支援計画を立て、実行する組織が必要です。認定NPO法人ジェン(JEN)は、そんな国際協力NGO(非政府組織)の一つです。木山啓子きやまけいこさんは、一九九四(平成六)年、ジェンの設立と同時に職員となり、現在は理事、そして事務長を務めています。戦争や災害のために何もかも失った人たちの支援活動から学んだこと、伝えたいことを、木山さんが語る。

「聞き手



木山啓子

★ハイチの被災現場から

——NPO法人ジェンは、日本に本部を置く国際協力NGOということですね。

木山 災害や紛争などのため緊急事態に陥った方々を支援する団体で、現在は九か国で活動しています。

——記憶に新しいところでは、今年一月、カリブ海にあるハイチで大地震がありました。現地は今、どんな状況ですか。

木山 ジェンは地震から四日後にハイチに入ったのですが、現地に派遣したスタッフの話によると、あちこちに遺体や倒壊家屋が放置されたままで、目を覆うばかりの惨状だったそうです。ハイチはもともと国自体が貧しいところで、被害が大きかったのです。

うですが、肉親を失うなど、想像を絶する体験をした方たちばかりでしょうから、みなさん茫然自失の状態なのではないですか。

木山 はい。「かわいそう」「なんとかしてあげなくちゃ」と、とにかくたくさん物資を差し上げたいのが人情なのでしょうが、それではほんとうの支援にはならないとジェンは考えています。被災者や難民の方々の中に、もともとは持ち合わせていなかったはずの依存心を芽生えさせてしまうことがあるからです。私たちの仕事は、支援がなくなったら後、被災者や難民の方々が自立して生活していけるよう後押しして差し上げることなんです。そのためには心のケアも必要です。当事者の自立と心のケア。ジェンは、この二つを活動の柱に掲げています。

暑い国なので衛生状態が悪化しないよう支援する必要を感じつつも、当面の緊急支援として、仮住まいの家を建てるためのトタン板ですとか、ハリケーン（カリブ海などに発生する熱帯低気圧）にも耐える釘^{くぎ}などをお配りして、被災者の方々自身に建ててもらおう支援をしました。

ハイチは、毎年ハリケーン被害を受けるところなんです。そのハリケーン・シーズンを前にしての今回の地震でしたから、何はなくとも家を再建していただくことが必要でした。今後どんなプロジェクトを行っていくかは、現地の人たちと検討中です。

★ほんとうの意味での支援とは

——被災直後や戦闘状態にある現場へ入るそ

——具体的には、どんな活動なのですか。

木山 例えば、二〇〇五（平成十七）年十月のパキスタン・カシミール地震のとき、冬がそこまで迫っていたので、まず急場をしのぐテントを配付したのですが、ただ配るのではなくて、生存者の方々に「このテントをいちばん必要としている人は誰ですか？」と問いかけて、話し合いで名簿を作ってもらいました。全員の分がないので紛糾しますが、あえて当事者間で合意してもらおうのです。

被災地や紛争地では、もともと地域のまともな役だった方たちが犠牲になっていることもままあります。そういう状況では、生存者を確認する調査能力や公正に物を分配する能力が低下し、情報伝達の仕組みなどが途切れてしまします。テントを受け取る家族を決める

行為は、そうしたコミュニティの力を取り戻すことに役立ちます。そうすれば、苦しい状況が続いても支え合うことができます。

コミュニティの力を回復するための支援は、必ず必要になってきますね。差し迫った状況下ですから、最初のうちは身内に少しでも多く物資を回そうとする方もいますが、私たちスタッフがくまなく歩いて、名簿がほんとうに適切かどうかを確認しながら、テントを配らせていただきました。

——〇八年五月、大型のサイクロン（インド洋に発生する熱帯低気圧）が襲ったミャンマーへの支援も続けていますね。

木山 ミャンマーはもともとサイクロンと無縁のところでしたから、備えがありませんでした。そこへ数メートルの高波が襲ったので、

避難する場所もなく、みなさん一晩中高波に洗われ続けたと聞きました。屈強な男性は両脇に丸太を抱えて流されるままにしのぐこともできたけれど、体力のない人はどうしようもなかったのだそうです。

——あれから二年。復興は順調なのですか。

木山 災害自体は一晚のことでも、被害は何年にもわたって続きます。特に、ハイチやミャンマーのように国自体が貧しいところでは、例えばミャンマーでは、今になってネズミが大発生しています。サイクロンでネズミの天敵も死んでしまったからだそうです。そのため、なけなしのお米も食べられてしまう。

そして、貧しい人たちは、以前は比較的豊かな人たちの田んぼで日雇いとして働くことができました。でも、サイクロンは豊かな人

からもすべてを奪ってしまったので、貧しい

人々が働いて自立していくための仕事もない状況です。一方で、建物の再建が進むなど、

一見順調に復興しているように見えてしまう。そうすると、被災者はまだ自力で問題解決できる状態にはなっていないのに、支援を打ち切られてしまうこともあるのです。

貧しい国を災害や紛争が襲うと、何もかもが崩れてしまいます。貧しいからこそ、当初の被害が大きい。被害が大きいから復興に時間がかかるし、復興途上でまた何かが起こると、さらに被害が拡大してしまふ。そういう悪循環に陥らないように、早い段階から自立を支援することが大切です。実際に、みなさん自力で解決しようとされているし、その力もお持ちですから、そうした努力を後押しす

るのがジェンの仕事だと思っています。

★誰かのためなら頑張れる

——先ほど、心のケアも支援活動の柱の一つとおっしゃいましたね。

木山 はい。例えば、〇四年十二月に起きたインドネシア・スマトラ島沖地震の影響で大規模な津波に襲われたスリランカ。ジェンは津波から四日目に現地入りしました。まだ水も引かず、その中にまだ収容されない遺体があるという状況の中で、私たちはあることに気がつきました。被災者の方々が、つらい体験を実に淡々と話されるんです。自分が気を失ってしまったために、胸に抱いていた幼い子どもが行方不明のまま、というような話を淡々と。その姿を目の当たりにして、この



津波被害から4年半後のスリランカにて(2009年8月)。写真提供/JEN

方たちの心の傷がどれほど大きいかを思い知らされたんです。物質的な支援も大事だけれど、復興には被災者の心のケアを早い段階からしなければと思いました。

そこで心のケアのプロジェクトをやらせていただいたのです。女性にはヤシの繊維からロープを作るココナツロープ・プロジェクト、男性には失くした魚取りの網を作る魚網プロジェクトに参加しませんか、とお誘いしました。みなさん最初は、お互いに挨拶も交わせないほど落ち込んでいらっしやいました。それでも、集まって一緒に作業をしていくうちに、だんだんと達成感が生まれてきます。そして、少しずつ元気が出てくるんですね。

でも、心に向けた思いは、つらすぎてなかなか言葉にできない。それでも、あるときふ

つと誰かが、自分の思いを口にするんです。「あ、この人も私と同じ思いをしている」「この人には自分のつらさがわかってもらえる」となれば、思いを吐き出せる人が増えていく。つらい状況は変わらないけれど、一緒に乗り越えようという気持ちになってくださる。

人間って、つらいときに何もしていないでいると、心の傷が癒えていかないのだと思います。あるお父さんのケースは印象的でした。彼は津波の前に一年間、家族と離れてイラクに出稼ぎに行っていました。一生懸命お金を稼いで帰ってきたやさき、津波が家族全員の命を奪っていったんですね。一時はお酒に逃げて、魚網プロジェクトにお誘いしてもまったくみえなかったのですが、あるとき、同じように家族全員を失った男の子に出会ったんです。

「この子は自分と一緒にだ。この子のために、自分にも何かできることがあるんじゃないか」と思ったところから立ち直り始めた。彼はその子を養子にして、お酒もやめ、魚網プロジェクトに参加して、やがてプロジェクトのリーダー格になってみんなを引っ張ってくれたそうです。人は、極限的な状況では、自分のためには頑張れない。でも、誰かのためだったら頑張れる。それはもう、人間のDNAに刻み込まれているのだと思います。

★「気の毒だから」にひそむ傲慢

——意外だったのですが、ジエンは日本国内での支援活動にも携わっているんですね。

木山 はい。○四年十月の新潟県中越地震の被災地に入ったのが最初でした。日本は人材

も資金も豊富ですから、ジェンの出番はないだろうとも思ったのですが、念のために様子を見かねてみたところ、「調整役が足りないので、ぜひ来てください」ということで、十日町市と川口町（現・長岡市）でやらせていただきました。

ボランティアをしたいという人たちはほとんど集まっているのに、仕事をもらえず待機している。一方で、被災者のみなさんは人手が欲しいのになかなか来てもらえない、という状況でした。被災者のニーズをきめ細かく聞き取るには、手間も人もかかりません。ボランティアの方たちに対しては、被災者に信頼されることが大事だということや、そのための心構えを説明しなければなりません。適切な場所に適切な人材を送るには、それなり

の方法論と経験が必要なんです。

日本では「ボランティア」という言葉が、「無償で何かをする人」、そして「無償だから支援の質が低くてもいい」と誤解されていると私は思っています。ぜひお願いしたいのは、お金をもらっていないでもいなくても、支援の押し付けにならないようにしていただきたい。無償だからといって支援の質が低くてもいいわけではありませんし、ボランティアだから無償でなければならぬということでもないと思います。本当に質の高いボランティア活動は、望まれない活動をしたり、依存心を高めたりしないものだと思います。

——新潟ではその後、十日町市の池谷・入山集落に入ったのでしたね。

木山 はい。現地では、建物への被害もさる

ことながら、住民の方たちの気持ちがあつたか、落ち込んでいらしたのが印象的でした。もともと七世帯しか住んでいない過疎地だったので、震災でさらに一世帯が里に下りてしまった。みなさん、「このままでは村がなくなってしまう」と不安を抱きながら暮らしている状況でした。

でも、私たちが村の方たちに方向を指し示すことなどできません。「気の毒な人たちだから助けてあげなきゃ」という意識にはなれないですし、この方たちが望む方向に近づいていけるように何かお手伝いできたらうれしい、というのが私たちの姿勢です。

緊急支援のあとに雪かきなどの支援を続けて徐々に徐々に関係作りをして、被災者の方々の表情や言葉が変わるまで、二夏ぐらい

かかったでしょうか。三年目の夏、「ボランティアの人たちが来てくれて元気が出てきた」「七十代の自分たちが将来に希望を持っている」「長生きして、村がどれほど変わるか見届けたい」と言ってくれたときは感激しました。今は、村を存続していくためにどうしたらいいかを村人自身で真剣に考えていらつしやるようなので、そのための支援を続けていきます。

★感謝と絆が幸せの素

——ところで、木山さんはなぜ国際協力の仕事にっこうと思つたのですか？

木山 私は前の職場でほんとうに仕事ができなくて、クビ同然で辞めているんですね。そんなとき友人に、「落ち込んでいてもしょう

がないよ。NGOの現場にでも行けば元気が出るんじゃない？」とすすめられて、そんなものかなと半信半疑でNGOの職員募集に応募してみたたら、「ネパールに行ってください」と。すぐにネパールに入って難民支援の仕事についたのですが、その三か月後には旧ユーゴスラビアで働いていました。九四年でしたね。旧ユーゴには足かけ六年いました。

——当時のユーゴスラビアは、まさに戦闘中でした。不安や恐怖心はなかったのですか。

木山　こんな私を派遣してくれると言うのだから、大丈夫なんじゃないかと(笑)。逆にネパールの難民の方々に、「戦争中のユーゴに行くなんて、大丈夫？」と心配されました。私たちは危険を逃れて比較的安全なところへ逃げてきた難民の方たちがいる場所に入るわ

けで、前線に近づきさえしなければ、戦闘に巻き込まれることはほとんどありえない時代でした。

——そうやって現場を踏む中で、「この仕事は自分に向いている」と感じたのですか？

木山　いいえ。「この仕事を続けていくことは、悲しい人たちに会い続けるということなんだ」と思いました。「この先もずっとそれに耐えられるのかしら」と悩んだこともありましたが、「この人たちの悲しみを私自身も悲しいと感じているうちは、私はこの仕事をやっていていいのじゃないか」と。むしろ、「同じように悲しい思いをしている人は世界中にたくさんいる」というふうには悲しみに慣れてしまったときは、この仕事をやめたほうがいいと決めたのです。そして、いまだに続

けているわけです。

——木山さんとしては、日本は恵まれすぎているとお感じになるではありませんか。

木山　「恵まれすぎています」とは思いません。日本のみなさんにとっては、それが当たり前なのですから。ただ、「恵まれているのに、どうしてこんなに不機嫌な人が多いのだろう」とは思います。でも、些細なことに腹を立てても暮らしていけるほど平和で豊か、とも言えます。ただ、私は支援現場で物のない暮らしを経験させていただいたおかげで、学んだことがたくさんあると思っています。物があつたのありがたみはもちろんです、その物が提供されるまでにどれだけの人の手を経ているか。そういうことに思いが至るようになりしました。

四〇度を超す暑さの中を何時間も車で移動

しなければならぬときなど、当然、水分を補給しなければなりません。でも、現地スタッフが調達してくれる生水では、こちらのおなが耐えられない。そこでミネラルウォーターを買うわけですが、日本のようにあちこちにコンビニがあるわけではありません。買うまでの間、水のことばかり考えているんです。本当にのどが乾くってこういうことなのかと実感しました。それに、このミネラルウォーターが製品となるまでに、浄水場で働く人、その浄水場の建設に携わった人……、無数の人の手を経ているんだなあと思うんです。そんな小さなことに感謝できるようになって、自分の暮らしがとても幸せに感じられるようになりしました。

——さまざまな国で支援活動をしてこられた経験から、世界の人々が幸せになるには、今後どうしていけばいいとお考えになりますか。

木山 私は、感謝の心と絆があればみんなが幸せになると思っています。絆は「誰かのために」という気持ちに支えられているし、「誰かのために」という気持ちは感謝の心から生まれてくるのではないのでしょうか。ほんとうは、みんなそれをDNAの中に持っているのだと思うんですが……。例えば、水のない地域に行ってみるとか、電気を使わない暮らしをしてみるとか、できる範囲でいいので、あつて当たり前のものを失った生活をしてみるのもいいかもしれません。失った生活をしてみると、感謝がわいてきます。ありがたい、ありがたいと思っていると、何でも幸せです。

そして、絆のありがたさも実感できる。

——自分もボランティアをしたいと思ったら、どうすればいいのでしょうか。

木山 ジェンは、「知る」「行動する」「続ける」「忘れない」「伝える」という、「今日からできる五つの国際協力」という標語を掲げているのですが、そのどれも結構です。実行してください。ご寄付も募っておりますし、ボランティアとして実際に体を動かしたい方はジェンにご連絡ください(12ページ参照)。「BOOK MAGGIC」といって、読み終わった本を無償で回収し、買い取り業者から支払われるお金がジェンに寄付されるシステムもあります。できることから、ぜひ行動に移していただきたいと思います。

(2010年5月11・12日放送)